
テレフォンカード

冴神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テレフォンカード

【Nコード】

N7254Z

【作者名】

冴神

【あらすじ】

妻を亡くした男が、ある日拾ったテレフォンカード。それには不思議な力があり――

(前書き)

以前作ったものです。ジャンルの断定はできないので、その他、とさせていただきました。

自販機が、いやに目に留まった。道路は舗装されており、家々が立ち並ぶその中で、目についたのだ。

自販機に無理やり千円札をねじ込むと、男は少しばかり悩んで、適当な缶コーヒーを買った。厚く堅い掌の上に冷たさが広がる。つり銭は無造作に上着のポケットに入れた。

一度その場で踏みしめると、男はこうつぶやく。

「変わったな」

どこか、それに虚無感のようなものも感じた。

男が向かった先は、この町では戦前からある由緒正しい寺と墓地だ。子供の時は、その前によく集まって広い敷地内で遊んだものだが、今は随分と静かであった。

その内に、ここも人と街に吞み込まれてしまうのではないか、ふと、男はそう思った。

よく見れば、少しばかりさびれている。黒く塗られた壁は、塗装が剥げて下地が見えている。

「よう、元気かい」

住職が顔をだし、挨拶をする。

「まずまずだ。あんたも相変わらず元気だな。それより寺は直さないのか？」

「小奇麗だけが寺の価値ではあるまいて。これはこれで良いものだ。それに……」

「それに、何だ」

「少しばかりさびれている方が、如何にも、らしいだろ」

白い歯を見せ、皺だらけの笑顔を見せる住職の、その言葉に半ば呆れながらも同意し、

男は墓地へと足を踏み入れる。

立派な、やたらと大きな墓石が目立つ中、男が向かったのは、白い小ぶりの墓石だった。

た。その右側には名前が三つ刻まれている。気さくな父と、勝気な母と、そして愛する

妻の名だ。

桶の水で丁寧に墓石の汚れを洗い流し、線香に火をつける。

男はゆっくりと手を合わせる。

「このあたりも随分と変わっちまったな――」

昔は、道路は土がむき出しで、家ももつと古臭い、木造のものばかりだった。だが、

決して貧しい場所ではなかった。商店街には人がにぎわい、子供が自転車を乗り回す姿

をよく見かけた。その時は小うるさいものとしか感じられなかったが、身勝手にも今で

は少しばかり恋しいものに感じた。活気が、あったのだろう。男はそう思った。

今はあまりに静かすぎる。新たなベッドタウンとしてこの周囲には確かに人が集まっている。しかし、人々はどこか虚しく、そして味気のない家ばかりの街になってしまった。

墓の前で目をつむると、男は三人の死ぬ間際のことを思い出すことが出来た。両親は、

共に天寿を全うした、よい死にざまだと思う。大病にも患わされず、死んでしまう、ほ

んの少し前に笑っていたのを覚えている。死に目にも会えた。

だが、最愛の妻は違った。二十五、六という若さで、肺炎が悪化し亡くなった。

その時の自分は、出張のため、関西方面に居た。その日、突然会社で電話がかかりそ

のことを知った。急いで帰り、死に顔を見つめると、少しばかり青白い顔をしていた。

それを見て、悲しみより先に男を襲ったのは、無念だった。

何もしてやれなかった。

その言葉が、口からこぼれ出た。体の中心から乾燥してしまったように、涙ひとつ、

流すことが出来なかった。葬儀が無事に執り行われ、その後の始末も済んだのち、男は

一人俯き、その数日後から仕事に戻った。高度経済成長期の空気が、町のいたるところ

からあふれ出した活気が、男を社会へと連れ戻した。

何かに追われていなければ、何もしなかっただろう、と思い出すたびに思う。何もせ

ず、ただただ身銭を切り、その日その日を曖昧な空気の中、生きていき、やがて無様な

死にざまを見せることになっただろうと思う。

目をゆっくりと開ける。一度軽く息を吐き出すと、上着のポケットから缶コーヒーを

取り出す。小さな男の手のひらに比べると、少しばかり大きく感じられる。舌の上には、

甘ったるさが広がり、その中から、仄かな苦みが突き出る。

「あまりうまくないな」

誰に言うでもなく、男は呟いた。口端を吊り上げる。

すると、あるものに男は気が付いた。一枚のテレホンカードだ。携帯電話が当たり

前のこのご時世に、あまりにも不似合な代物に、男は思わず目を剥

いた。

「懐かしいな。まだあったのか」

よく見ると、三十の少し手前の辺りに点が打たれている。その穴は、富士の山の頂に

かかる雲を無慈悲に貫いていた。それをそっとポケットに入れた。

水を入れた桶を持ち、墓地から立ち去るときふと、空を仰いだ。

灰色の雲が空を覆っ

ていた。

「まいったな」

自宅は、あまり遠くはないが、今にも雨が降りだしそうであった。住職はどこかへ出

かけたらしく、寺は錠がかけられており、中には入れない。男は早足で進む。ちょうど、

家と寺の半分ほどの位置で、雨に見舞われた。

運が悪い。ただ、そう思った。

雨の降りしきる帰路で、電話ボックスを一つ見つけた。暗闇の中で、蛍光灯の光がひ

どく眩しいものに感じられる。

ガラスの内側は、まるで時間に取り残されているかのような印象を抱かせるそれに、

男は飛び込んだ。

体中がずぶぬれになっていた。まるで、丸ごと洗濯機にぶち込まれたかのようなだった。

ポケットの中のハンカチを取り出そうとした時、指先に鋭い感触を覚えた。

「持ってきちゃったな」

それを指に挟み、ゆっくりと取り出す。テレフォンカード。

そういえば、これはまだ使えるのだろうか。ふと男はそう思った。ちょうど目の前に

は、今では数少ない公衆電話がある。男はゆっくりと受話器を持ち

上げると、それを差

し込む。自宅の固定電話にでもかけてみることにし、さっそくボタンを押そうとしたそ

の時、受話器から声が聞こえた。男の指が止まる。

「もしもし、どちら様ですか？」

まさか、信じられない。男は目を見開き、その場で固まった。

「もしもし、もしもし……」

今でも、この声は聴き間違えない。柔らかな物腰を思わせる、少しばかりのんびりした話し声。

妻の声だった。

男には雨の音が、ひどく遠いものに聞こえた。

二

もしもし、俺だ、と男が腹の底から絞り出すように声を出したのは電話が繋がってから十秒以上後だった。

「あら、あなた。仕事の方は大丈夫なの。たしか今大阪の方の会社で仕事中でしょ」

「ああ。大丈夫だ。ところで今、何年の何月だったかな？」

男はふと尋ねると、妻は七六年の十月、だと答えた。

「おかしな人ね。いったいどうしたの？」

「いや、ふと気になっただけだ」

そうだ。七六年の五月、その時男は大阪に単身赴任していた。そして、その時妻は死

んだ。つまり、死ぬ間際の妻と、男は電話をしているのだ。

そのことに気づくと、思わず胸の辺りが苦しくなる。だが、それを必死にこらえて男は声を出す。

「仕事が早めに終わってな。電話をしたくなっただ、病気の方は大丈夫か？」

「珍しいわね。大丈夫よ。お医者様がくれた薬が効いているみたい。あなたは大丈夫な

の。このところお仕事が忙しそうです——あまり無理をしないでね」
その言葉を聞きながら、男は、昔と変わらない、と感じた。自分の身よりもこちらの

心配をする。昔の自分はそれにどこか甘えていたのかもしれない。今の自分は、どうだ

ろうか。外見は大きく変わった。頭髮は色が落ち灰色になっている。声も向こうは気づ

かないのかしわがれているのが分かる。それに手の甲にはシミが目立ち体中に皺も増え

た。どこか乾いているような気がする。しかし、中身も変わったのだろうか。

「……今は随分暇なんだ。話でもしないか」

「あらあら、本当に珍しいわね。明日は雹でも降るのかしら」

電話の向こうで微笑んでいるのがよく分かる。口元に手を当てて、小さく笑うのだ。

あの笑顔で、男は惚れたたのだ。

「雹は嫌だな。ところで、向かいの公園の紅葉はどうだ」

「ええ、とてもきれいよ。そういえば、あなたが私に告白したのも、紅葉がある所だったわね」

「おいおい、何だよ恥ずかしいな」

「だって、公園で焼き芋食べながら告白だなんて、聞いたことないわよ。紅葉よりも顔

を真っ赤にして。しかも私が頷いたら、あなた思わず芋を喉に詰まらせて、慌てて水を

飲んでいるんですもの。今のあなたからは考えられないわ」

今のあなた、か。そうかもしれない。家庭を持つてからは、昔以上に仕事に没頭する

ようになった。ただ、俺と結婚したがために、不自由な思いをさせたくなかったからだ。

不自由が確実に不幸せだとは思わない。逆もまたしかりだ。だが、当時の俺はただ物を

満たそうとした。それが、一番確実だと思い込んでいたからだ。

「全く、秋が来るといつもそのことを言うな」

「だって、あの時のあなたがおかしくておかしくて。思い出しただけでも」

妻の笑い声が聞こえた。耳元を赤くしながらも、男はその様子にどこか安堵した。こ

うして話していると、肺炎を患っているように感じない。そして、それ以上にそれが原

因で死んでしまうなど、夢にも思わないだろう。それも、すぐ後に。

「そうだあなた。帰ってきたら、何を食べたい？」

「随分と気が早いな。まだまだ先だろう」

「だけど、こうして聞く機会なんてなかったんですもの」

男は少し考えた風で、小さく味噌汁が飲みたい、と答えた。それも、わかめと豆腐、

そしてネギの入った、赤と白の合わせみそを使った味噌汁だ。

「いいか、細い長ネギなんかじゃだめだぞ。太いネギだ」

「はいはい。相変わらずこだわるわね」

「それは――」

「それが一番旨い味噌汁だから、でしょ」

男は少しばかり気恥ずかしそうに、そうだ、と言った。

「いいか、きちんと言ったぞ」

妻は小さく笑うと、楽しみにしてて、と答えた。

それからの二人の話題は、他愛もないような話題ばかりだ。昨日の晩御飯や近所の出

来事。何も、特別な会話を交わしてなどいない。だが男は心の底から癒された。今迄、

心にまわりついていたあらゆるものが、剥がれ落ちているのだ。

プライドや悲哀と言

ったものが剥がされ、男は本音で話すことが出来ていた。

今までは出来なかった。妻の葬式の時ですら、取り乱すことを恥じ、思い切り泣くこ

とが出来なかった。そういうことが、男らしい、と勘違いをしていた。その結果、どん

どん心と体が離れて行った。いろいろと理由をつけて、自分の心を偽り続けてきていた。

昔は感情をあらわにする男はみつともない、と感じていたからだ。

だから、生きた実感

がしなかった。ただ、虚無感が体を包み惰性で生きているような感覚だったのだ。

だが今、久しぶりに心身が一体となった。これが、俺なのだ。俺のしたかったことな

のだ、と男は思う。

「今日のあなたはよく話すわね。本当、何かあったの？」

「最初に言っただろ。ただ、話したくなっただんだ」

ふと、視線を移すと男は息をのんだ。

赤く光る数字が、6、を刻んでいた。

「どうかしたの？」

妻が心配そうに聞いてくる。

「いや、なんでもない」

男はポケットに手を突っ込む。すると、缶コーヒーを買った時のつり銭を見つけた。

すぐさまそれをつまむと、公衆電話に投入し始めた。しかし、それらは全ておつりとして返されてしまう。

数字が、5になった。

ふざけるな、ようやく俺は本当の俺になったのだ。なのに、ここで別れだ。男は何度も何度も小銭を投入するもやはり数字は増えることはない。掌には汗が滲み、かすかに震え小銭をうまく入れることが出来ないでいる。思わず男は、悔しさを言葉に出してしまった。

待ってくれ。俺は何もできなかったのだ。伝えられなかったのだ。頼む、切れないでくれ。まだ話したい、話していたいのだ。そう念じるも数字は増えることはなかった。

赤い数字が4になる。

「大丈夫？」

「いや……電話がそろそろ切れそうになっただけだ」

おもわず声が震えていた。唇を一度思い切り噛むと、男はゆっくりと話し始める。

「すまん……」

「何が？」

「そばにいてやれないことだ。俺は、仕事にばかりかまけて——お前を置いてきてしま

った。こんなことをするために結婚をしたわけじゃないのに……俺は、お前を幸せにしてやりたかった。ただ、それだけだったんだ。だけど、お前が一番つらいときに俺はお前を置いてきてしまった。こんなことは普通の男は、しない。俺が薄情なだけなんだ。

頼む。許してくれ。俺が不甲斐なく、身勝手にどうしようもない男だということは分かる。その為に、お前に苦勞を掛けてしまった。すまない……すまな

い……」

男の眼からは涙があふれ出た。体中が火を放っているように、熱い。息が出来ない、胸が苦しい。当たり前だ。三十年前のあの日に流せなかった、三十年間流すことのできなかった涙を今、まとめて流しているのだ。電話ボックスに寄りかかり、俯く。

「そんなことないわよ……」

男は思わず顔を上げる。妻が一度小さく息を吸った音が聞こえた。「あなたは薄情なんかじゃない。いつも私のことを思っているもの。少しでも私が不自

由しないように朝早くから夜遅くまでずっと働き続けて――だけど、その弱音を私に決

して洩らそうとしない。私が見ていないところで、こっそりと手伝ってくれたり、力仕

事をしようとする、必ずあなたが来て代わってくれたりした。この病気のことで

そう。いいお医者様を見つけて、治す為に必死に働いている……あなたは不器用で、口

下手で、おまけに恥ずかしがり屋だから、言葉に出来ないだけであな

たはいろんな方法で私に愛を伝えてくれる。本当に嬉しい。ここまで私のことを愛し

てくれる人なんて、今迄の人生であなただけよ。ありがとう。私は女として、一人の人

としてあなたと出会え、そしてあなたの妻になれたことをうれしく思うわ。だから、自分

を責めて、そんなに泣かないで。ね」

男は溢れる嗚咽を必死にこらえながら、ああ、ああ、と繰り返しつつやき続けた。

「じゃあね……」

「ああ、じゃあな」

そこで、電話が切れた。カードが出てくる。取り忘れ防止のブザーが虚しく鳴り続ける。

男は外を見ると、雨脚が弱まっていることに気づいた。ゆっくりと外に出て歩き出す。

雨粒が頬を打ち、火照った体を冷やす。不思議と視界が明るくなった気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7254z/>

テレフォンカード

2011年12月24日01時46分発行